書評

［評者］
髙田真二
帝京大学麻酔科学講座・医学教育センター

症候から診断・治療へ
循環器診療のロジックと全人的アプローチ
磯部光章 著

●B5　200頁　2017年3月
定価：本体4,000円＋税
［ISBN978-4-89592-876-2］MEDSi刊

筆者は医学部の卒前教育に長年関わっている．指数関数的に増加する医学知識の圧力の下で多くの試験を突破することに汲々とせざるをえない学生たちが，医学部入学当初の新鮮なモチベーションを維持しながら医師に必要な資質を修得し，プロフェッショナルへの階段を昇ってゆくのをどのように支えることができるのか，日々悩みつつ奮闘している．そんな筆者にとって非常に刺激的な一冊が現れた．

複数の大学で何度もベストティーチャー賞やベストプロフェッサー賞に輝いた磯部光章氏（東京医科歯科大学循環器内科主任教授＝発行時）の手に成る本書は，循環器病学を網羅的に扱う教科書ではない．磯部氏が医学部2年生から6年生に実施してきた講義・演習における学生との対話をそのまま再現した誌上ライブ集である．「症候や疾患を覚えるのではなく，基礎的な病態生理や理論をもとにして個々の患者の問題を論理的に把握すること」を主眼に展開されたこれらのライブは，サイエンス（医学）とアート（医療）の融合が臨床医としての資質の源泉であるという氏の哲学の実践と，そのメッセージを惜しみなく学生に伝えようとする熱い心とがあって初めて可能になった．同時に本書は，「医学教育の国際標準化」に曝されその意義が軽視される傾向にある旧来型の座学の講義でも学生の思考力を引き出すことは可能であり，紙上の患者であっても共感的に患者のナラティブにアプローチすることは可能であることを実証している．大切なのは授業の形態ではなく，教員が学生に向きあう姿勢であることを再認識させられる．

本書の第6～9章は，主要症候から病態診断に至る過程の要所で担当学生が講義の一部を分担発表する参加型ケーススタディである．学生がこのような高いレベルの発表をできることに，筆者は羨望を感じる．本書で展開された授業は氏の大学だからこそかもしれない．しかし，学生と双方向の対話形式で臨床推論を進め，学生の回答が間違っていてもその中に含まれている正しい部分を拾いあげ，質問を投げ返して正解へ向けての思考を促すことなどは教員の資質に帰することであり，筆者の施設でも実践可能であると感じた．

第5章「臨床診断のロジック」では，ヒューリスティックや認知バイアスが臨床診断に及ぼす影響が述べられている．医療安全に必須の認知的ノンテクニカルスキル（状況認識・意思決定）を向上させるためには認知心理学的分析が必要と考え，「患者安全学」の講義・演習でこのようなテーマを取り上げている筆者としては，54ページの「写真」と併せて，“我が意を得たり”の思いである．

細かな点では，おやっと首をかしげる記載も何か所かあるが（「ノルアドレナリンは純粋なα刺激物質である」「ARDSの急性期治療にステロイドパルス」），それは本書の価値をいささかも貶めるものではない．本書を読み，これまでの自分の講義・演習のスタイルを再考してみようと刺激される読者は少なくないと信じる．専門領域にかかわらず，医学教育に関心のある方には是非一読をお勧めしたい快書である．本書を読んで，自分もこのような本をいつか書いてみたいと思ったことも最後に付け加えておきたい．

2026/09/25 07:59:57
©IGAKU-SHOIN Ltd, 2017